

博士論文をまとめた「明治の東京計画」(岩波書店、1982年)は私の人生を変えました。

江戸が東京に変わっていく時代の首都構想を歴史の流れのなかで描き、毎日出版文化賞を受賞する。推薦者は経済学者の伊東光晴さんで、この一冊を通し、小説家の丸谷才一さんや劇作家の山崎正和さんにも知られるようになった。

論文を書き上げたのは79年。テーマを探していたある日、東大経済学部の図書館で、国立国会図書館憲政資料室が所蔵する「三島通

博士論文 岩波から出版

17

庸文書」のガリ版刷り仮目録を見つけた。

三島は山形で道路建設を強行し、福島で自由民権運動を弾圧した鬼臈令として有名だが、「臨時建築局」と表題のある史料リストに、三島副総裁とあった。

臨時建築局は明治19年(1886年)に、列強並みの壮大な首都建設を目指す井上馨外務大臣の主導で内閣に設置された組織。井上が総裁兼務だが、当時、警視

総監だった三島が副総裁を兼務していたとは初耳でした。

半信半疑で憲政資料室へ行く

と、三島副総裁が授受した文書が大量にあり、内閣制度創設(1885年)の頃、首都をどうつくるかを巡って井上と山県有朋内務大臣の間で激しい対立があったことがわかった。

列強との不平等条約改正を悲願とする井上は「官庁

総監だった三島が副総裁を兼務していたとは初耳でした。

半信半疑で憲政資料室へ行く

と、三島副総裁が授受した文書が大量にあり、内閣制度創設(1885年)の頃、首都をどうつくるかを巡って井上と山県有朋内務大臣の間で激しい対立があったことがわかった。

列強との不平等条約改正を悲願とする井上は「官庁



神子畑鉄橋(兵庫県)の実測調査を行った博士課程1年の夏季合宿(左端が藤森さん、右端が村松貞次郎先生、その左が堀勇良さん)

内体制を固めるのが先との考えだった。井上は剛腕の三島を腹心に据えて優位に立つが、結局、改正交渉頓挫で失脚してしまう。

私は関係者遺族、外務省外交史料館などを回り、井上・三島陣営が山県陣営解体を画策した「秘密建議書」や、ドイツ人建築家招聘の全交渉過程を記した史料も発掘した。1970年代は明治の元勳の資料が公開され始めた時期で、研究のタイムINGKも良かった。

岩波に、村松貞次郎先生を通して原稿を持ち込んだのは、最初の本は一流の出版社から出たかったから

です。当時は大学に残れるメドはなく、建築史を続けるには出版の実績を築くしかないと思っていた。

「無名の院生の論文を巡り岩波でも議論があった。決め手は「世界」「文学」編集長を務めた慧眼・田村義也の支持で、「この本については、企画や書名の決定から装丁にいたるまで、なにかと関わった」(田村「の字ものがたり」と異例の扱いとなる」)

論文が出てすぐ、政治史の御厨貴さん、小説家の荒俣宏さんの同世代2人が訪ねて来た。御厨さんは刺激を受けたと評価し、荒俣さんは「帝都物語」の構想に役立つと言ってくれた。

「明治の東京計画」で私は建築史の研究者として生きていく足場をやっと得て、長いトンネルの先に明るさが見えてきた。

(編集委員 柴田文隆)

時代の証言者

藤森照信 建築探偵

「パリのような大礼服を着た帝都」に仕立てることを熱望した。一方、山県は国

集中計画」を練り、東京を

「無名の院生の論文を巡り岩波でも議論があった。決め手は「世界」「文学」編集長を務めた慧眼・田村義也の支持で、「この本については、企画や書名の決定から装丁にいたるまで、なにかと関わった」(田村「の字ものがたり」と異例の扱いとなる」)

(編集委員 柴田文隆)